

平成21年3月31日現在

研究種目：基盤研究 (C)
 研究期間：2005～2008
 課題番号：17520249
 研究課題名 (和文) モン・クメール諸語間の統辞構造の差異に見る言語変化メカニズムに関する類型論的考察
 研究課題名 (英文) A Typological Survey on Mechanisms of Linguistic Change as Emerges from Differences in Syntactic Structures among Mon-Khmer Languages
 研究代表者
 藤井 文男 (FUJII FUMIO)
 茨城大学・人文学部・教授
 研究者番号：40181317

研究成果の概要：

本研究の目的は、オーストロ・アジア語族の中では他の語派から類型的に隔絶された統辞構造を示すムンダ諸語の実態調査を通し、本語派が同語族他語派から如何なるメカニズムで分離したかを明らかにするための基盤を構築することにあった。

研究終了の現時点で、以前は光を当てられることの少なかったムンダ語ナグリ方言の実態に、これまで恐らく学術的に言及されたことのない統辞現象等も含め、相当のところまで迫ることができた。

交付額：

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	1,100,000	0	1,100,000
2006年度	700,000	0	700,000
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,200,000	420,000	3,620,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：フィールドワーク、インフォーマント、インタビュー、言語接触、クレオール化、言語類型論、言語普遍論、言語系統論

1. 研究開始当初の背景

全体として研究が遅れているオーストロ・アジア語族の中でも、中核となるモン・クメール語派から地理的に隔絶されたムンダ語派は、単にその系統論的位置付けに問題が多いだけでなく、基本語順がSOVである点や高い膠着性を示すなど、類型論的に見てもこの語族の中では極めて特異な存在である。

ムンダ諸語のこうした類型的特質は通常、周辺で行なわれるヒンディーなどのインド・アーリア系やドラヴィダ系諸語の影響に帰せられるが、基本語順に関し、SVO → SOVの変化は一般に極めて稀なケースとされている。ムンダ語派を特徴づける統辞的属性が実際、この類型的変化と連動しているとしたら、この歴史的变化を可能にしたのは如何なるメカニズムだったのか？

こうした諸問題を解明することは、オーストロ・アジア語族に関する系統論的観点からは元より、一般言語学的にも類型論の立場からも極めて重要だが、この種の議論に耐え得るほどにムンダ諸語の実態は十分には解明されていないのが実情である。

2. 研究の目的

こうしたムンダ語研究の現状に鑑み、本研究では特定の現代ムンダ語方言を選び、その対象について文法構造のあらましと特徴的統辞現象が、この言語に対して自ら実地調査したことのない者でも的確に俯瞰できて、上述の「背景」で触れた問題点に関し、一般言語学的な観点からの議論に十分に耐え得るだけの情報提供が可能な、機能的 Reference Grammar を編むための基盤を構築することを目的とする。

このことは、当該言語が現実のコミュニケーションの現場で如何に機能しているかを克明に明らかにする必要があることから、実質的には伝統的な「文法事項」の枠組みを越えた統辞現象をも調査対象に含めることを意味し、懸案の Reference Grammar の編纂と平行して初心者向けのムンダ語への導入書を編纂する準備行動とすることも目的に含まれてくる。

3. 研究の方法

本研究の対象言語は、現代ムンダ語のナグリ方言とした。比較的、先行研究の多いハサダ方言との一致を示す部分も確かに多いが、微妙に異なる統辞現象も示すことから、先行研究は援用しつつも、基本的にはオーソドックスなインフォーマント・インタビューを通じて一次データを収集することとした。実際、特に談話機能に関するデータなど、フィールドワーク的手法に依らない収集は不可能であったと思われる。

基本的に彼地の乾季（日本の冬）に小刻みな出張を繰り返す形の調査となったため、収集したデータは帰国後に分析し、その結果を基に次の調査のための質問票を準備するつもりでいたが、調査時のインタビューでの展開があまりにも速く、質問票は主に彼地で準備することがほとんどだった。

本研究の枠組みで行なった現地調査は、実際には以下の通りである：

- 1) 予備調査: 2006/01/06 - 01/16
- 2) 本調査 I: 2006/02/16 - 02/25
- 3) 本調査 II: 2006/03/15 - 03/30
- 4) 本調査 III: 2006/12/15 - 12/31
- 5) 本調査 IV: 2007/02/07 - 02/23
- 6) 本調査 V: 2007/03/07 - 03/25
- 7) 本調査 VI: 2007/12/13 - 12/31

- 8) 本調査 VII: 2008/03/04 - 03/29
- 9) 本調査 VIII: 2009/02/08 - 02/24
- 10) 本調査 IX: 2008/03/07 - 03/26

初回の予備調査では、ムンダ諸語の基幹部分が行なわれている東インドのジャールカンド州の主な地区を訪れ、現地の状況に対する下見と共に実際に行なわれているムンダ諸語の分布を確かめ、対象を狭義のムンダ語 (Mundari) に定めてインフォーマントの確保が可能か否かを探ったところ、同州州都 Ranchi 市に居住するナグリ方言の話者の存在が浮かび上がり、第二回目以降は毎回、同市を調査地と定めて同じインフォーマントを対象として聞き取り調査を行なった。

それまでの経緯では幾つかの偶然が重なりはしたものの、方言の選択も含め、結果としては幸いしたように思う。州都である Ranchi 市は空路によるアクセスが可能なことを始めとして同州の他地域に比べて条件が良く、更には上述したように狭義のムンダ語の研究ではハサダ方言が先行していてデータに関してもこちらの方がより得やすくはあったが、結果としてそれまであまり顧みられることがなかったナグリ方言に対する本格的な調査が可能となったからである。

しかしながら、問題が皆無だったというわけではもちろんない。調査活動の実施上でいちばん大きな問題だったのは、何と言ってもインフォーマント自身は研究者との英語によるコミュニケーションが図れるほど英語に習熟していないことだった。

この点は確かに最後まで課題を残す形となったが、仮に英語のできるインフォーマントが見つかったところで、あるいは研究者自身がヒンディー等、インフォーマントの母語をある程度は操れるような“理想的”な状況が整っていたところで、調査自体が期待通りに展開するわけではない。もちろんのこと、そうした条件自体がマイナスに働くことこそないものの、インフォーマントと通訳はヒンディーを介して情報交換を行なっていたにも拘わらず、ヒンディーが間に挟まることで寧ろ困難が生じるケースは実際、多々あった。

研究者がヒンディーをよくしたにしても同じことが起こらなかったという保証は全くない。ムンダ語ナグリ方言の構造自体がそれまで、研究者にとって研究対象として全く馴染みのない存在であった以上、意思疎通の言語として何語を挟んだにしてもその言語に関する知識を分析に活用する可能性には最初からかなりの制約があったわけである。

その意味では、通訳を介在させたことで

発生した問題としては、特に調査活動の初期段階に於いてその進展に若干の遅れをもたらした点と、研究費としては計上していなかった謝金を膨らます結果となったことを指摘するだけで十分と思われる。全体として見れば、通訳を介在させなければならなかったことは逆に、聞き取り調査時に於ける研究者の気持ちを引き締めさせることに繋がり、全体としては対象言語の特質を一層、明確に浮かび上がらせる結果を生んだとのポジティブな評価を下すこともできよう。

4. 研究成果

冒頭の「概要」でも示したように、現代ムンダ語ナグリ方言に関しては、その文法構造の骨格が理解できただけでなく、特にコミュニケーションの現場で実質的に問題となる談話機能等も含め、この言語の機能性はかなりの部分、明らかにすることができたと考えていい。語彙に関しては十分なデータが収集できたとは言えないので今後、若干の追加調査が必要にはなるが、言語研究者以外の初心者でも利用可能な語学書を編纂するための基盤は整った。

ムンダ語を類型論的に特徴づける諸統辞現象も、先行研究では恐らく言及されていないものも確認でき、こうしたトピックについては学術論文の形で部分的に公表を始めていて、そうした対象となる統辞現象や関連したトピックも今後は順次、公開していただけるだけの結果が出ている。こうした研究成果は、専攻生に対する専門の授業でも活用するまでに至った。

本研究はただ、結果的にはムンダ語の調査のみで終始し、当初、想定していた同語族の他言語との比較研究のための基盤構築には至らなかった。今後、改めて別枠でのプロジェクトを立案したい。

具体的成果に関しては、主に学内で行なわれた言語学研究会に於ける口頭発表、次項「主な発表論文等」で取り上げる論文の執筆を通して順次、報告してきたが、以下では簡単にその概略を紹介することとした。

(1) ムンダ語の特質とその類型論的位置付け

本研究の概略とその初期的成果については「現代ムンダ語口語文法研究上の諸問題」という論文で報告したが、本論文の要点は次の通りで：

- a) ムンダ語の分布・本研究の目的の提示
- b) ナグリ方言の音韻構造と“正書法”
- c) ナグリ方言の動詞構造の特質

続いて発表される論考で詳しく取り上げることになる、ナグリ方言に於ける動詞構造の形態的特質に特別の力点が置かれている。

本研究は最終的に：

- a. 現代ムンダ語にクレオール化の痕跡がみとめられるか?
- b. ムンダ語派とモン・クメール語派は如何なる接点を持つか?
- c. ムンダ語はオーストロ・アジア祖語から如何なる経緯で分離したのか?
- d. オーストロ・アジア祖語とは類型論的には如何なる言語だったのか?
- e. 自然言語の歴史的变化を説明する「クレオール化仮説」はどこまで普遍的か?

等の懸案を解決するための基盤構築を目指す、その前提を成すのは何と云っても対象言語の実態を明らかにすることである。本論文はその意味で、現地調査の対象となったムンダ語ナグリ方言の概要とこの言語の文法構造の示す形態論統辞論的特質を明らかにすることにあつた。

筆者がこれまでにやってきた、主に東南アジアで行なわれる少数民族の固有語に関する研究で実践してきた方法と同様、本論文では対象言語に対するラテン・アルファベットによる“準正書法”的表記方法を提唱しているが、音韻論的には二種類の *glottal stops* の位置付けの問題がある。具体的には語末で母音で始まる表現が続くと [-g] の *allophone* を示す /-g/ (cf. *menag* ‘to exist’) と単純に *glottal stop* としてしか具現化されない /-q/ (*naq* ‘now’) の対立があるように見える点である。

この問題については、例えば any “1SG” の属格形には *anyaq* と *anyag* の二形態が存在するなどがその後の調査で判明し、理論的にも同じ音素に属すバリエーション的な *allophones* と解釈する必要も出てきそうであり、未だに釈然としない点も残っている。また、音韻構造に関しては、他方言では長母音の音価を示す箇所には /-h-/ が現われたり /-j/ が /-b/ や /-d/ と同様に *checked plosive* として具現化されるなど、ナグリ方言は概括的に言ってハサダ方言に比べてかなり“保守的”な印象を与えており、ムンダ語の系統論的な把握に際しては一定の寄与が期待される。

形態論もしくは統辞論的特質について、ムンダ語ナグリ方言に於ける動詞の形態的特質について概観した後、本論文は特に“Object Agreement”の現象について取り上げている。この現象はムンダ諸語では広く知られており、当然ながらハサダ方言に関する先行研究でも報告されているところであるが、本論文では「一致」を示すマーカーが、*goj lijae/ledkinae/ledkoe* ‘he/she has killed’ のようにアスペクト助動詞に組み込まれるケースと、*goji/gojkin/gojko tainae* ‘he/she was killing’ のように本動詞に標示される場合とで差違が認められると

いう、これまでは十分に解明されたとは言えない問題にも言及しているのが特徴である。こうした“未解明”の統辞現象については、今後に予定している論考では正面から取り上げていきたい。

ムンダ語ナグリ方言は、語彙的な意味構造についても極めて特徴的な造語法を示す。例えば、*gitij* ‘to sleep’ の動詞語彙がその典型だが、この語は単に “to sleep” と翻訳するだけではその語彙的意味を的確に表現したことにはならない。厳密に言うと、この語彙は人が眠りに落ちるまでの“プロセス”を指し、英語ではさしずめ “to try to sleep” とでも表現するところを一語で示す、ということになるわけだ。

重要なのは、こうした表現を「進行相」もしくは「持続相」などのアスペクトで使う際、両者は英語などとは異なって厳格な対立を成す、という統辞論的な現象に絡んでくる点である: *gitij tanae* vs. *gitij kanae*. 要するに、前者は対象が眠りに落ちるまでの“プロセス”を表わすのに対し、後者は眠りに就いた後の“状態”を示すという対立が認められるのである。その意味で、通常の「現在進行形」と解釈される *Mangra naq manxdi jom tanae* ‘Mangra is eating rice’ と同じ発想で “Mangra is sleeping” を *Mangra naq gitij tanae* と表現することはできないのである。

(2) Object Agreement とその脱落について

前論文で触れた、極めて特徴的なムンダ語ナグリ方言の Object Agreement に関し、文法構造の骨格を成すこの一致現象が他動詞構造に於いても見られないケースがある、という不可解な問題については、次項で示す「Animacy と“他動詞性”」の論考で取り上げた。

よく知られているように、ムンダ語に特徴的な Object Agreement は、他動詞構造に於いて目的語が [+animate] の属性を示す時だけ引き起こされるが (*sim jom-i-ae* ‘will eat chicken’ vs. *manxdi jom-∅-ae* ‘will eat rice’), *tanae* 「現在進行相」や *kenae* 「単純過去」など、特定のアスペクト助動詞が用いられる場合、ナグリ方言では問題の「自動詞構造 vs. 他動詞構造」の形態的対立が neutralise される。

ハサダ方言などと同様、アスペクト助動詞が動詞の定形を構成するとき、ナグリ方言も一般に「自動詞構造 vs. 他動詞構造」の対立が -n- vs. -d- でマークされる。例えば、*goj* という動詞語彙は自動詞「死ぬ」と他動詞「殺す」の haplology だが、*goj kanae* ‘is dead’ と言えばアスペクト助動詞である *kanae* という定形の形態が -n- を語幹に示すことから自動詞構造をマークすることが窺われるのに対し、*goj kajae* ‘has

killed’ では定形 *kajae* (形態論的には {ka-d-i-ae}) で、-j- は他動詞マーカの {-d} と目的語の三人称単数をマークする {-i} が合体したものと理解できる) の語幹が -n でではなく -d で終わっていることから、喩え目的語表現が表層に現われていなくとも他動詞構造であることがマークされていることが判り、「殺してある」との解釈が可能となるわけだ。

こうした構造的差違に鑑みれば、上で触れた *tanae* や *kenae* などのアスペクト助動詞は、基本的に自動詞構造をマークする形態ということになるはずである。しかしながら、これらの助動詞が使われる場合、*jom* ‘to eat’ や *ru* ‘to beat’ といった“典型的”な他動詞語彙が使われ、しかも目的語が [+animate] を示すことが明らかな場合でも Object Agreement は引き起こされず、自動詞形の *tanae* に単に形態的に対応する他動詞形の **tadae* はもちろんのこと、agreement marker を伴った **ta-j-ae* / **tad-kin-ae* / **tad-ko-ae* という形態は用いられない(別のコンテキストでこれらが用いられることはあるが、機能は「現在進行相」ではなく、言わば「現在完了相」となる)。

しかしながら、「自動詞構造 vs. 他動詞構造」の対立が完全に失われるかと言うと必ずしもそうではなく、marked な他動詞構造は [-animate] の場合は *jom la-d-ae*, [+animate] では *jom la-j-ae/la-d-kin-ae/la-d-ko-ae* というふうにより -d- を語幹に持ち、かつ agreement marker が後続する形態が存在し、この言語に於ける問題の対立構造の重要性は十分に伝わってくる。

もうひとつの“中立型”アスペクト助動詞である *ke-n-ae* には marked な他動詞型として [-animate] の *ke-d-ae* と共に [+animate] の *ki-j-ae/ke-d-kin-ae/ke-d-ko-ae* がそれぞれ対応し、やはり「自動詞構造 vs. 他動詞構造」の対立自体が完全に解消するわけではないことが判る。それでは、*tanae* や *kenae* が他動詞語彙とも共起し、Object Agreement をも放棄する事態はどう理解したらいいのか? 本論文の狙いは正に、この点をこそ明らかにすることにある。

結論として示されるのは、端的に言うと *tanae* や *kenae* はある種の「自動詞化メカニズム」である、という認識である。実際、Object Agreement が放棄される事態が雄弁に物語るように、*tanae* や *kenae* を用いた構文では談話機能的に目的語に対して焦点を当てることは不可能である。表出される命題としては同じ「Mangra が Somri を殺す」であっても、*Somri-ke goj kijae* と言えば目的語として標示される犠牲者の Somri に対して話者が同情心を示している

という implicature が認められるのに対し、*Somri-ke goj kenae* の場合、話者の関心は偏に主語で示される Mangra の行為にのみ寄せられていることが前面に出ていて、Somri の位置付けは完全に背景に退いているのだ。要するに、目的語はある意味で動詞表現に incorporate されていて、文全体はその限りでは自動詞構造化している、と理解できるのである。

本論文は最終的には、「目的語の存在」という統辞論的把握に対して「他動詞性」の意味論的定義を提唱し、それによって *raq* 'to cry' や *landa* 'to laugh' といった、我々の感覚では自動詞としか解釈できないような動詞語彙まで、ingressive 表現に際しては *jana* がとれずに *lada* を使わざるを得ない、という統辞論的な “irregularity” を説明しようとしている。

(3) ムンダ語と “Ablaut”

前論文で取り上げたムンダ語ナグリ方言に於ける Object Agreement の現象を出発点に、「自動詞構造 vs. 他動詞構造」の形態的対立がこの言語の文法構造の中核を成している実態を明らかにしようとしたのが「“Ablaut” は印欧諸語の専売特許なのか?」の論文である。

前論文でも示したように、いわゆるアスペクト助動詞が使われる場合、「自動詞構造 vs. 他動詞構造」の対立は *-n-* vs. *-d-* という形態的差違によってマークされる (cf. *goj kanae* 'is dead' vs. *goj kajae* 'has killed')。しかしながら、こうした助動詞を使う必要のない単純現在や未来時制では、本動詞をそのまま定形とするしかないため、問題の文法的カテゴリーを形態的にマークする手段を欠くのが実態である。

このため、*gojog* 'to die' vs. *goj* 'to kill' のように別の表現方法が存在する、僅かな語彙ペアでしか「自動詞構造 vs. 他動詞構造」の対立はマークされないこととなる。しかし、もしもこの対立がこの言語の文法の骨格の奥深くに根差した構造的なもののだとすれば、そうしたマーキングが defective にしか為されない状況は合点のいくものではない。こうした “irregularity” の実態を解明しようとするのが本論文の主旨である。

本研究の枠組みでムンダ語ナグリ方言の現地調査を始めて以来、Object Agreement 絡みで筆者にとってどうしても捕捉し得ない統辞現象があった。それは、常識的に考えればどうあっても自動詞としか解釈できないような動詞語彙が、三人称複数の目的語と一致する agreement marker をとることがある、という事態である (cf. *eskul sen[og]-ko-ae/sen[og]-ko-qe* 'shall/should go to school')。この現象が他動詞語彙で起こる

のであれば（そのことは実際、起こり得る）それは当然のことであり、ことさら問題にするには当たらない (cf. *rukoe/rukoqe* 'will/would kill [more than three persons]')。こうした自動詞がとり得る agreement marker がまた、三人称複数の目的語との一致を示す *-ko-* だけで、双数の *-kin-* や単数の *-i-* は対象外になっていることも引かかる。

問題解決の糸口は、いわゆる「接続法」にあった。結果から言えば、「自動詞構造 vs. 他動詞構造」の形態的対立は、直説法では確かに解消してしまうが (cf. *sen-a-e* 'will go' vs. *jom-a-e* 'will eat'), 接続法では例えば *sen-oq-e* 'would go' vs. *jom-eg-e* 'would eat' のように、明確に示されるのである。アスペクト助動詞との違いは単に、問題の対立が *-n-* vs. *-d-* という子音交替ではなく、*-o-* vs. *-e-* という「母音交替」によるメカニズムに置き換えられるだけに過ぎない。

本論文では、ムンダ語ナグリ方言に於ける基本的な “mood” は印欧諸語の場合と違って接続法の方であることを暗示しているが、接続法の用法は実際、この言語では印欧諸語に比べて明らかに広い。この *-oq-* vs. *-eq-* の対立はただ、音韻・形態的には若干、弱いのが実態で、例えば emphasis marker である *-gi* が使われるとほとんど聞こえなくなる。要するに、直説法のマーカーである *-a-* は接続法では顕在だった「自動詞構造 vs. 他動詞構造」の形態的対立を “中和” してしまう、ということなのである。(もちろんのこと、*sen-o-a-e* 'will go' vs. *jom-e-a-e* も散見され、ムンダ語の動詞形態の分析は多くの場合、整理するのが非常に困難になる。)

上でも暗示したように、アスペクト助動詞は一般に単純現在や未来時制では用いられないが、いわゆる話法の助動詞はやはりムンダ語ナグリ方言でも多用される。上で問題にした *sen-ko-ae* は、結果から言うと実は第三人称複数の有性目的語と一致する agreement marker ではなく、*sen + koae* と分析すべき話法の助動詞だった。そのことは、このフレーズの逐語訳が “will go” ではなく “shall go” と表現できることにも現われる。

しかしだからと言って、**jom koae* は文法的に許容されない。上の *sen koae* 'shall go' に対応する *jom* 'to eat' の形態は *jom keae* なのだ。つまり、この話法の助動詞は自動詞構造と他動詞構造とで別々の異形態を持っており、両者はまたしても *-o-* vs. *-e-* の母音交替で弁別されるのである。(この話法の助動詞は語幹自体が問題の母音交替を示し、この語幹に更に直説法のマーカーである *-a-* が接辞されても *-o/-e-* が埋没する

ことはない。)

この種の母音交替は、語法の助動詞のグループでも *koae/keae* ‘shall’ に留まらず、*loae/leae* ‘to try to ...’ などにも及び、更には *urui* ‘to be ill’ のように統辞的に自動詞構造と他動詞構造の両方の表現法をとり得る動詞語彙でも、“You will be ill tomorrow” と言う場合、*Am gapa urui-oq-m* (自動詞構造) のように Object Agreement が引き起こされない場合は *-o-* が、そして *Amke gapa urui-m-eq* (文頭の *am* ‘you’ に付加されている *-ke* が目的語であることをマークし、agreement marker の *-m-* は接続法のマーカーである *-eq-* に前置されている) のように一種の非人称表現として他動詞構造をとる場合には *-e-* が現われるというふうにも極めて規則的な分布を示し、「自動詞構造 vs. 他動詞構造」の対立はある意味で語彙レベルから文法構造の中核に位置づけられていることが明確に窺えるのである。

こうした「母音交替」は鮮明な形で印欧諸語に特有とされる “Ablaut” を想起させる。印欧諸語でも本来は造語法のメカニズムだったとされるが、ゲルマン語などはこれを時制という典型的な動詞のカテゴリー再編に活用し、我々は現在、“Ablaut” の文法的機能を信じて疑わない。その意味では、ムンダ語ナグリ方言に於ける上述の「母音交替」もまさしくそうした文法のカテゴリーとしての「自動詞構造 vs. 他動詞構造」の対立をマークするメカニズムとして確立していると理解すべきなのではないだろうか？

本論文は関連して更に、*kus* ‘to be happy’ などの、いわゆる形容詞が *-gi* を用いる強調形を介してしか接続法が表現し得ないか等にも言及している (cf. *kus-a-e* ‘is/will be happy’ vs. **kus-eq-e* vs. *kus-g[i]-ige*)。要するに、語彙的にも自動詞構造でしか用いることのできない *kus* の接続法形は *-eq-* 伴った **kus-eq-e* ではなく、*-oq-* に導かれる *kus-oq-e* という形態しかとれなかったのである。

上で取り上げてきた「*-o/-e-* Ablaut」の概念の導入によって明らかになる「自動詞構造 vs. 他動詞構造」の対立が構造的なものであるという認識なしでは分析すら滞っていたムンダ語ナグリ方言の諸現象は、この他にも数々、存在する。ここで一つだけ追加するとすれば、*tanae* という「現在進行形」のアスペクト助動詞と未来を表わす表現を使いつつ共起できるのが *senog* ‘to go’ など僅かな自動詞表現に限られ、他動詞は基本的にこれとは共起できないという asymmetry を如何に説明するか、といった問題が挙げられよう。

英語では「未来進行形」とでも言うべき

Mangra gapa Ranchi senog tanae ‘Mangra is going to leave for Ranchi tomorrow’ は可能なのに、何故 *Ranchi senog* ‘to go to Ranchi’ を *manxdi jom* ‘to eat rice’ で置き換えると非文法的になってしまうのか？ これまで、合理的な説明は不可能だった。

しかし、「自動詞構造 vs. 他動詞構造」の形態的対立がムンダ語ナグリ方言の骨格を為す基本的な文法のカテゴリーに直結している実態が明らかとなった今、我々はこうした “irregularity” に対しても難なく、説得力のある説明を加えることができる。具体的にはそれは、*tanae* というアスペクト助動詞自体、基本的には自動詞形でしかないからである。対応する他動詞形は、実は *taqae* なのだ。

本研究の枠組みで現地調査を重ねた結果、この *taqae* という (語法の) 助動詞の存在自体には、比較的早くから気付いていた。しかしながら、上記の認識なしには *tanae* との関係には全く思い至らなかったのが実情である。本論文では、こうした問題にはそれほど深く切り込んではいないが、ムンダ語ナグリ方言に於ける “*o/e* Ablaut” の確認により、この言語の文法構造の解明が格段に進んだことだけは確かと言えよう。関連諸現象の解明を改めて期したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

①藤井文男, 「“Ablaut” は印欧諸語の専売特許なのか?」, 茨大人文学部紀要『人文コミュニケーション学科論集』7 (2009, in press), 査読なし

②藤井文男, 「Animacy と “他動詞性”」, 茨大人文学部紀要『人文コミュニケーション学科論集』6 (2009), pp. 43-76, 査読なし

③藤井文男, 「現代ムンダ語口語文法研究上の諸問題」, 茨大人文学部紀要『人文コミュニケーション学科論集』4 (2008), pp. 119-139, 査読なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤井 文男 (FUJII FUMIO)
茨城大学・人文学部・教授
研究者番号: 40181317

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者